

広島文教国文往来

横山 邦治

○「水師營の会見」という佐々木信綱作詞の小学唱歌がありました。「旅順開城物成りて」と始まる一く九の長い歌なのですが、「敵の將軍ステッセル」と「乃木大将」とが武士道的精神のもとに降伏の会見するわけで、戦時下の忠国愛国的風潮を鼓舞するに好適な唱歌とて、大きな声で唱わされた記憶が私にもあります。二月二十八日から四日間、書道専修の学生を中心とした訪中団に随行して大連外国語学院を訪問した際、本学に留学していた高峯華さんが大連周辺を案内してくれましたが、学院内を案内してくれている時に、「先生、今から旅順に行つてみませんか。」と言つてくれたのです。

いたはず。日本の書物を見たいと熱望しているのをよく知っている高さんが、それからあれこれと走り廻つて下さつて、今から夕刻までの時間で、タクシーを利用して旅順に行つてみましょうというこゝとにしてくれたのでした。若い宮崎先生も同行して下さいつて、旅順にマツシグラということになつたのです。外国人は軍港なので入ることが出来ないのだそうですが、一人当り一万五千円を案内料として提供すれば入れるらしいのです。この一万五千円也というのが何なのかはよく判らないのですが、高さんも便乗してくれてアレコレ観光案内です。タクシーの運転手さんが途中停車で家庭に電話しています。高さんの話では最近タクシー運転手を襲う殺人強盗団が激増しているので、遠出の時は心配しないようにと電話をしておくのだと申します。中国ではタクシーの運転手さんはお金持なのでネ

ラワレルらしいのです。何だか大変な冒險しているようで恐ろしくなりましたが、足下の明るい内に帰り着けば大丈夫也とて超スピードです。旅順市内に入る手前で警察官かと思われる観光案内要員がタクシーに乗り込んできて、旅順市内の案内をするのです。ここで戦前の日本の高等専門学校にあったはずの日本の書物が現在どこにあるか今から調査できるかと、高さんが懸命に説明してくれるのですが、何のことかよく判らないらしく、(宮崎先生は、こんな妙なことを聞く人は初めてのことで、何のことか判らぬのですよと笑つておられました。私は妙な人ということのようであります。)高さんも諦めてとにかく最初に博物館に連れて行つてくれるよう頼んでくれました。博物館の人だったら何か判るのではないかという気持ちもあつたようですが、旅順では有名な博物館も閉館時間とかで何とも間の悪いことです。せいては事を仕損ずることとて、性急な注文はここで引つ込めたのですが、さてさて私は次の目的がありません。ここからは案内人の一方的大活躍、日本人観光客の定

石ルートらしい日露戦争を次々に案内してくれました。二〇三高地とか何とかの戦跡です。二〇三高地に立つと旅順港は眼下であり、遼東半島の突端までが一望されます。乃木將軍の「山川草木転荒涼」という文字は、戦争の惨禍をふまえたものと思ひ込んでいましたが、「十里風腥新戦場」というのですからそうであるに違いないのですが、眼下の景は「転荒涼」です。緑の少ない岩石の多い赤茶けた大地が広がっているのです。旅順口ですから、二〇三高地からですから、海が広く見渡されるのですが、海岸沿いといいますが、白砂青松で緑多く、地味豊かで生産性の高いという瀬戸内の風景を思い浮かべる私にとっては、何とも異質で荒々しく乾燥した荒蕪の景でした。三月という寒冷の季節ということもあるのです。う、リング島のリングの木の実がなくて枯木のように林立しているということもあるのでしょうか、とにかく「転荒涼」です。日清・日露の両戦役で二度もこの遼東半島が戦場となったのですが、その日本の兵隊たちがこの荒涼たる大地を植民地にしようとして戦ったでしょうか。

豊葦原瑞穂の国に生を享けた庶民が、この赤茶けた大地に進出して住みたいと願ったでしょうか。日本人の唯一の対外侵略であった和寇だとて、海賊行為で荒らした土地に定着しようとはしていないということもあって元来日本人は対外植民政策をしない民族であって、日清・日露両戦役以後、昭和二十年八月十五日の大東亜戦争の敗北までの日本の対外侵略は、瑞穂の国の日本人にとつて何かの悪夢だったのではないかと思うことでした。植民地時代に生活してアカシヤ香る大連をつかしむ人は多いのですが、その大連とて緑豊かな大地とは言えないのです。こんなこと考えていたのでは観光にも何にもなりません、案内人の申す通りに旅順の戦場を一巡で大連に一目散です。目的の本は見られませんでしたが、路傍の民家が門前を赤い提燈で飾り立てている風景が珍しく、文化大革命を経ても旧正月の風習が根強く生きていた中国民衆の民族的強靱さを感じたのでした。中国の長い歴史の中で、乃木大將の歌の記憶は消え去っているのですが、日本人である私どもは、重い記憶として忘れ去つ

てはいけなものとは思ふのです。○下垣内和人先生が、平成八年三月三十一日付で本学を去られました。十一年間の本学での教員生活であられたのですが、その間教師としては学生諸君にとつて面倒見のいい先生として、研究者としては中国俳壇史の大系化（『中国俳壇史の研究』平成五年十月和泉書院刊という大著があります。）を成就された方として、印象深いお方でありました。広島文教女子大学地域文化研究所の所員として所長として、数多くの仕事をして下さいました。特に地域文化資料叢刊として『芸備俳諧資料集』（I・II・III 溪水社刊）を刊して下さったのは、斯界のために画期的なお仕事だったと思います。研究者としての先生は、これからもあの独自の速足で古本屋やら骨董屋やらをめぐって、新しい資料を発掘し続け、その明細を学会に報告して下さいます。すし、教師としての先生は、本学の非常勤講師として教鞭をとって下さることは変わらないので、清新で豊富な資料による俳諧分析の教授展開を楽しむことができますはずですし、ともあれここでは宿痾

の喘息—この発作が激しくて退職することを決意されたのでした—が一日も早く軽快されることを祈ることで、休息して体力を付けて下されば、きつと治るはずです。

○下垣内先生の後任として栗原秀雄先生が平成八年四月一日付で赴任下さいました。栗原先生は異色の人材です。昭和三十三年三月に広島大学文学部文学科言語学専攻を御卒業後、中国放送即ち私どもの

の申しますRCCに入社され、ラジオ局業務部、同本部制作部、文化局事業部に在職、最後は企画調査部長として活躍されました。その間に昭和五十三年二月から昭和五十七年五月までの長期番組「ひろしまの民話」を担当されているのですが、そこで広島県内の昔話を中心とした民話を博搜され、その一部を放送すると共に音声による原資料の保存を目的とする企画だったのです。そこで先生の興味は民俗学に向い、日本口承文芸学会、説話伝承学会（評議員）、日本昔話学会、広島民俗学会（常任理事）などの会員として活躍されるようになり、学問的業績を積み上げてこられたのでした。RCC

を停年退職された後は、その豊富な体験を生かして本学の非常勤講師として「話し言葉表現法」とか「民俗学」を担当していたのだいたいのですが、このたび本学短期大学部国文学科の助教授として就任していただくことになったのです。国文学研究の人には見られない新しい国文学の世界を切り開いて下さって、私どもに刺激を与えて下さることを期待するのとであります。

○藤沢毅講師が近世国文学の担当として、私自身の後任として本学に赴任して下さいました。昭和三十八年八月二十八日生れですから、大変お若い人ですが、上智大学の大学院の博士課程を修えられた後、上智短期大学の非常勤講師、国文学研究資料館非常勤研究員を勤務されていた、正に新進気鋭の研究者です。研究テーマは読本です。私自身が読本の研究を終生のテーマとしていますので、文教においては私自身何時消え去ってもいいと言えらる人を得たわけです。読本が大量に出版された化政期から天保にかけては、読本作者に文学的営為を行わせる外的な力として書肆という出版と販売を行なう媒体

があり、挿絵を書く浮世絵師もそこに参加して、極めて多角的な営為の結実としての読本があったのでした。そこにある多様な営為の相関関係を明らかにすることは、現在の読本研究の主要テーマなのですが、正に藤沢先生の目はそこを見ていて下さるようです。曲亭馬琴の『近世説美少年録』の書誌学的研究が出发点なのですが、今は数多くの近世的出版物の検証による読本の多角的調査研究が実現しているようです。期して俟つべしであります。

○国文学科の橋口純子さんが、朝月優子さんと変わりました。橋口さんは、本学の国文学科に入学してきてから、大学院と合わせると十年間もの間、本学と縁をつないで下さった方です。研究室や資料室の整理から学生個々のお世話まで、先生方の手足となつて動いていただきました。私的に申せば、『読本研究』の出版という事業も、橋口さんの手助けがなかったならば、全く成り立たないものでありません。感謝の言葉もありません。『文芸学』に二つの論文を残していただいた後輩の皆さんが目指すべき

人物像の一つの典型であると思います。朝月さんは、平成七年度の国文学科の卒業生です。短期大学部からの編入生なのですが、短期大学の卒業論文の一部が『文教国文学』に載っていることはよく知られていることです。田口先生の御指導にすることが大なのですが、短期大学部においての卒業論文の成果が公表されたのは初めてのことでした。今後は国文学科の様々な雑務の手助けを願うのですが、先生方と学生諸君のよき媒体として活躍して下さることでありましょう。

○国文学科の古い卒業生の何人かは尋ねてくれている鈴張の故地の陋屋は、二十米幅くらいの鈴張川の川辺に立地しています。周囲は全て竹藪と田であります。川向うも国道との間は田圃であります。平坦な地面を田圃にしたのではなくて、堂床山と片廻山の谷間の川の周辺の傾斜地を、恐らく中世から近世にかけて、平家伝説こそありませんがどこかの落人か何かの数代にわたる心の結果としてできた、相当な高さまで川石をコツコツ積み上げた石垣に囲積された田圃であります。その我が家の川向うの田圃が、突然に廃

土で埋め立て始められたのです。超スピードで小山のように土が盛り上げられまして、川向うの国道を通るバスの姿も見えなくなる始末で、抗議を申し立てる余裕もありません。川幅も狭くなつて大水が出たら大変也との慌ててその田圃の持主に談判いたしましたところ、田圃を作つてくれる人が横着で仕事を十分してくれないので、埋め立てをして二十四時スパーでも作ろうと思つたこと、吃驚仰天であります。川向うとは申せ、太田川の川幅とも違う鈴張川なので、田目の前に忽然と不夜城のごときスパーが出現するという破目になるわけです。星が丘という三千人規模の団地の入口という立地ですから、目の付けどころはなかなかで商売繁昌ということにはなるのでしようが、石見街道沿いに店が並んでいた鈴張の市―それは可部の宿場に次ぐ石見街道の中継地として小さいながら繁昌した市場であつたようです―は、今でも閑古鳥が鳴いていますけれど、今度こそ門前雀羅のごとであります。お宅の前は便利になるそうです。うと祝言を申される人もあるのですが、隣りの

家に行くのにも大分時間がかかるという一軒屋に生まれ育つた者といましては、目の前にスパーなんて驚動天地で世紀の大変事であります。オウムより大変であります。私自身が目下田圃作りを全くしていない不肖の子でありますので、文句一つ言えないのであります。大仰に申せばこんなことでこれからの日本の将来はどうなることやらと空恐ろしくなります。時には鈴張の地を、地名も鈴張るなんて何となく優雅でありますので、桃源境のごとしと法螺を吹いていたこともあるのですが、目の前がネオンキラキラの不夜城ではお先真つ暗であります。夜は暗くて、昼明るく、初夏の夜には螢火チラチラという場所が、日本には少なくなり過ぎております。長大息する次第であります。阿亜！